日本海に遊ぶ

京都大学水産実験所職員
上野　正博

フィールド科学教育研究センター

3月の半ば、実験所では甲高いチェーンソーや金属切断機の音が響き渡っています。実験所の象徴であった本館の取り壊し工事が始まったのです。旧海軍火薬廠（しょう）司令部として建設され、80年近く風雪に耐えてきた建物も、この原稿が掲載される頃には跡形もなくなっている予定です。

30年あまりにわたって暮らしてきた建物がなくなることに、一抹の寂しさがないといえば嘘になります。でも、室内に樋をつけなくてはいけないほどのひどい雨漏りに、壁や天井の崩落。夏は焼けた煉瓦が熱を保ち夜中でも35℃以上、冬はすきま風で部屋の中でも氷がはるという有り様でしたから、取り壊しもいたしかたないでしょう。代わりに建った研究棟と飼育実験棟はプレハブ作りの安普請ですが、空調完備でまずは快適です。

さて、実験所は4月1日から、国内五カ所にある演習林（上賀茂・芦生・和歌山・徳山・北海道）、瀬戸臨海実験所（白浜）、ならびに亜熱帯植物実験所（串本）と統合され、京都大学フィールド科学教育研究センター海域ステーション舞鶴水産実験所に生まれ変わります。舌をかみそうに長ったらしい名前ですが、略称は今まで通りに京都大学水産実験所です。

取り壊しが始まった実験所本館（佐藤船長撮影）

本館の取り壊しは、前身の水産学科以来、55年続いた農学部の付属施設から全学共同利用施設、つまり大学の直属施設への変身を象徴しているかのようです。新しくできるセンターには将来、農場や牧場も合流し、森－里－海を総合的に研究する組織を目指しています。

海から蒸発した水が雨になって森や田畑を育み、枯れ葉や枯れ草は川を下って海を潤す栄養源になっています。つまり、森－里－海は水を仲介にして深く繋がっているのです。一方で、人は森の木で船を造り、里の綿や麻で網を作って漁をし、獲物は食料としてまた肥料として山奥にまで運ばれていました。

こんな風に森－里－海が深い関係にあるのはよく分かるのですが、では森－里－海を総合的に研究するって、具体的には何を研究するんやというのがいま抱えている大問題。例えてみれば海幸彦と山幸彦が一緒に仕事をしようとするようなもので、センター発足を前に頭の痛い日々が続きます。